

投稿

「せいざのおはなし」

～オリジナルの天文絵本の製作～

河野明里（和歌山大学教育学部）

1. はじめに

私は2007年6月より、指導教員である富田先生に同行し、月に一度の「うちゅうのおはなし」[1]で、ひかり保育園を訪問している。ひかり保育園は大阪府藤井寺市にあり、地域の中核的保育園で、私たちの活動を含め多彩な活動を進めている。保育園のような小学校就学前の子どもを対象とした天文分野の教育的実践は、臼田・佐藤功美子氏（国立天文台ハワイ観測所）による、ハワイ島のプレスクールでの取り組み[2]などの例がある。

「うちゅうのおはなし」は、平日10:30から11:00の時間帯を中心に35～40分程度、「せいざのおはなし」、「くも」、「これはなんだ?」、「しつもん」で構成している（各コーナーは10分弱）。対象としている園児は、3～5歳児の約80人である。毎回実践後に、園長、主任保育士、各クラスの担任保育士全員と約30分協議会を持ち、実践内容について反省点や改善点を見出している。園長、主任保育士とは、これとは別に議論の時間を持ち、毎回合計で2時間近い協議会になっている。

今年度、私は主に「せいざのおはなし」を担当した。「せいざのおはなし」は、卒業研究として取り組んだものでもあり、その内容は卒業論文として公開している。そして、この研究の形ある成果として、オリジナルの天文絵本「せいざのおはなし」を完成させつつある。今回は、その絵本の製作について報告したい。

「うちゅうのおはなし」の実践は、世界天文年2009公認企画である。また、「うちゅうのおはなし」に加え、私はひかり保育園での観察実習を行い、いくつかの保育園行事にも参加してきた。さらに、国立天文台ハワイ観測所の研究者

がひかり保育園を訪問し、園児と交流することも実現した[3]。

2. 保育園での実践から

「せいざのおはなし」は、黄道十二宮の神話をもとに、私が園児向けにアレンジしたものである。PowerPointで絵を表示しながら、園児に紙芝居風にお話している。この絵も、いろいろな文献を参考にしつつも私のオリジナルである。

「せいざのおはなし」は、今晚見える星座と関連が強いわけではないし、見えるとしてもとても見つけにくい星座もある。しかし、「せいざのおはなし」は、保育園で行われるお誕生会や、子どもの持つおとぎの世界とのつながりを持っている（これまでのお話では、園児が保育園の行事で劇をした童話とのつながりもあった）。そして何より、私は子どもたちを「おはなしの世界」、「本の世界」、「科学の世界」に案内したい。「せいざのおはなし」に親しんでもらうなかで、これらの世界を自分たちのものにしてほしい。この、将来の「科学を知る力」の土台になるであろうという願いは、保育士の先生方と共有している考えである。

さて、私は日頃から、保育園で読み聞かせできるような星の世界の絵本の数が少ないと感じている。天文に関する絵本について、塚田健氏は以前から、その数が少ないと提起している[4]。また、「天文学とプラネタリウム」が日本天文学会2006年春季大会（和歌山）で天文絵本・児童書の展示会を開いている[5]。

実際、「せいざのおはなし」のお話の脚色や絵を描く作業において、参考にできる絵本が少なく苦労した。ひかり保育園には天文に関する絵

本は何冊かあるが、保育士の先生によると、「子どもにどうやって読んであげたら良いかわからない」本が多いそうである。

そこで、参考にできる絵本が少ないのなら、自分で作ってしまおうと考えた。現在、黄華堂もオリジナルの天文絵本の完成に向けて活動中である[6]。

3. 絵本「せいざのおはなし」

この絵本の特徴は、二つある。一つ目は、保育園で実践したものであり、さらに複数の保育士の先生の目が通っていることである。絵本は、子ども自身がよく読んでくれるかどうか、大事な評価点だと考える。子どもはこれで喜ぶだろう、子どもだからこのくらいで大丈夫だろうというように、大人が勝手に判断していることがあるかもしれない。実際に園児に見せて話しながら改善を加えていることは、この絵本の大きな強みと言える。

二つ目は、子どもが自分で字を読んで、絵本を読み進められるようにしたことである。ひかり保育園での実践において、園児は字を読むことが好きで、なかにはカタカナもすらすら読める園児がいることを知った（もちろん個人差がある）。また、読み聞かせをする大人が読む文章と、子どもが読む短い文章を二段にしている絵本の存在を知った[7]。私の絵本にもこの先行事例を取り入れ、子ども向けの文章は目につきやすいように大きく表示した。読み聞かせに使うだけでなく、子どもが自分で読むのを大人が隣で聞くのも良いし、大人が自分の読み物として楽しむこともできる絵本を目指した。

以下に少し例を見ていただこう。絵本から、2月のみずがめ座のお話の一部を抜粋して紹介する（図1、紙面上では白黒だが、実際には色鉛筆画のカラーである）。





あらしがきました。

すると、晴れていた空が急に曇りだし、あたりは暗くなり、いやな天気になりました。

「嵐がきたのかな？」

ガニメデスはつぶやきながら立ち上がると、羊の群れを追い始めました。



がにめーですを つれさったのは
ぜうす だったのです。

ガニメデスが連れてこられたのは、神様たちの住むオリンポスという神殿でした。

神殿に着くと、鷲は姿を現してこう言いました。

「怖がることはない。私はゼウスだ。お前はこれから、神殿で神様にお酒をつく仕事をするのだ。そのかわり、お前には永遠の若さと美しさを与えよう。」

ガニメデスを連れ去ったのは、なんと、神様たちの王であるゼウスだったのです。



わしは がにめーですを つれさり
ました。

そのときです。真っ黒い鷲が、ガニメデスに向かって、さっと飛んできました。

「助けて、お父さん！」

ガニメデスは、家にいるお父さんに助けを求めました。

しかし、鷲はあっという間にガニメデスを連れ去ってしまいました。



がにめーですは おとうさんが
しんばいでした。

神殿で働けることはとても嬉しいと、ガニメデスは思いました。しかし、病気がちな自分のお父さんのことが心配でした。

「僕がいなくなったら、お父さんは大丈夫だろうか。」



図1 絵本の内容の例 (2月、みずがめ座)

みたがるかを調べ、より完成度の高い絵本を目指したい。この作業を経て、この絵本を何らかの形で公表したいと考えている。

5. 謝辞

指導教員である富田先生には、普段から多大なご指導をいただき、深く感謝いたします。そして、私の研究を見守り議論して下さい。ひかり保育園の岡田桂子園長先生、井本トシミ主任保育士、担任保育士の先生方には大変お世話になりました。深くお礼申し上げます。

参考文献

- [1] 富田晃彦、嶋田由美「保育園での天文アウトリーチ活動」日本天文学会 2007 年春季年会、発表番号 Y15b (2007)
- [2] 臼田・佐藤 功美子「小さい子供が楽しめる宇宙の話」天文教育 2007 年 1 月号, 45
- [3] 河野明里、富田晃彦「ひかり保育園での 2 年間」学芸 (和歌山大学教育学部発行) vol.55、印刷中 (2009)
- [4] 塚田健「天文系の絵本を求めて」天文教育 2006 年 3 月号, 38
- [5] 塚田健『「天文絵本・児童書展」を開催しました』天文教育 2006 年 5 月号, 46
- [6] 黄華堂 <http://www.oukado.org/>
- [7] たとえば、「母と子の世界名作絵物語全集 (全 10 巻)」佐藤春夫、志賀直哉監修、学習研究社

4. 今後の見通し

これから、この絵本自体を園児に見てもらいながら、もう一度「せいざのおはなし」をやってみたい。どのお話を何度も聞きたがるか、読

河野明里